一人一人の人間としての存在を中心に！

「『あうち』の意味するもの」に関連し、いくつかのメールをいただいた。

その中には、「あうち」と同様な意味あいで、イタリアのフェリーニ監督の映画「道」の中の「石ころ（どんなものにもこの世にある意味があり、価値がある）」の話、聖書の中の「地の塩（岩塩を貴重とは思わないけれど、実は大地にとってなくてはならないもの）」の話、また、聖書の「（ゆっくりと休む場を提供し、一匹の虫によって一夜で枯れた）とうごま」の話を紹介してくれるものがあった。

「あうち」、「地の塩」、「石ころ」、「とうごま」にしろ、こうしたメールの話に接する中で、私自身の中にどうにも納得できない感情が生じてきた。「この世に存在するもの、全てに意味がある」ということには共感できるが、どこか日頃振り向きもされない存在への、応援歌的にしか思えなくなってきたのである。（「あうち」、「地の塩」、「石ころ」、「とうごま」のそれぞれの話の真の意味するところは、短いメールからの私の勝手な一時の解釈以上に、深い意味をもつ話とは思うが。）

こう思い始めると、糸賀一雄先生と梅津八三先生の凄さを改めて感じる。

糸賀先生は、重症児と係わる中で「この子らを世の光に」をベースとした「福祉の思想」を語っている。

梅津先生は「ある障害児を『他の子どもと較べることをあえてしない』で、その子と『生命活動の革生（旧態を改革して新しい方向に進むこと）をたがいに輔け合う関係』こそ、『障害児教育を含め、人類一般における教育的係わり合い』と位置づけ、『生きているということは、どういうことなのか』を、自分自身の中に具体的に問い続けて行くことが大切」と語っている。

障害のある、なしに拘わらず、全ての一人一人の人間としての存在を中心にすえ、現代の価値観そのものを問い直し、一般社会の意識改革に通じるであろう両先生の著書を、改めて読み直してみたいと思う。

（2003 年 02 月 19 日　記）